

山口哲子全集

第十卷

水原秋桜子
富安風生
山口青邨

大野林火
平畑静塔

監修

明治書院

山口哲子全集

第十卷
紀行集・年譜

山口誓子全集 第十卷

三八〇〇円

著者 山口 誓子

昭和五十二年十月二十五日發行

發行者 明治書院 代表 三 樹 彰

印刷者 大日本法令印刷 代表 田 中 忠

發行所 株式會社 明治書院

千代田區神田錦町一―十六八二〇一
電話二九二―三七四一 振替東京三一四九九一

山口誓子 第十卷 紀行文・年譜・初句索引

目次

紀行文

第一章 北海道・東北	一
------------	---

夏の航路	二	山の人々	四
------	---	------	---

稚内	三	白河の関	四
----	---	------	---

平泉	五	象潟	六
----	---	----	---

出羽三山	九	松島にて	三
------	---	------	---

第二章 関東・信濃	五
-----------	---

八丈島一周	六	日光	六
-------	---	----	---

堂ヶ島	七	山葵	三
-----	---	----	---

蓼科行	七
-----	---

第三章 東海・近江	九
-----------	---

佐屋行	四〇	赤羽根の椿	四三
-----	----	-------	----

豊橋	四三	渥美	四四
----	----	----	----

伊良湖	四六	紙漉き	四六
-----	----	-----	----

岐阜	四	大垣	四
伊吹山	四	彦根	三
幻住庵	三		
第四章 伊勢	七		
桑名	六	猿蓑塚	六
伊勢詣	六	二見・鳥羽	五
志摩の崎々	五	伊賀上野	六
第五章 京都・大阪・南紀	七		
嵯峨	六	金福寺	六
奥丹後半島行	八	和歌山	八
高野山	八	潮岬	八
難流し	七		
第六章 奈良	九		
大仏殿	八	三月堂	九
春日神社	八	唐招提寺	七
法隆寺	九	季節の窓	一〇
吉野	一〇		
第七章 北陸・山陰・瀬戸内海	一五		
出雲崎	一六	市振	一〇
黒部行	一六	金沢	一〇

山中	一二三	種の浜	一二三
打ち水	一二五	鳴門游記	一二七
須磨	一二九		
第八章 四国・九州	一二三		
松山	一二四	高松行	一二五
小豆島行	一二七	高知	一二九
日向坪谷	一三〇	南薩行	一三三
第九章 国外	一三五		
新京	一三六	安奉線	一四〇
アンコール巡礼	一四二	仏跡と更紗	一四七
インド行	一四八	タジ・マハール	一五〇
仏跡	一五三	ニュージールランド紀行	一五五
メキシコ紀行	一五六	スリランカ行	一五七
年譜	一六一	松井利彦	一六一
解題	一二五	松井利彦	一二五
解説	一二五	松井利彦	一二五
初旬索引	一三五		

第一章 北海道・東北

夏の航路

夏の午後七時過ぎといへば電燈がついたばかりの晩景である。ここは天保山棧橋、私は「すみれ丸」の甲板^{デッキ}にゐる。安治川は奥深く曲りこみ、その河港はもとよりここからは見えない。涼風がすうすういつて吹き通る。

天保山棧橋から表通りを見てみると、曾て大阪駅の地上歩廊から表通りを見たときと同じ旅情に襲はれる。

大阪市の一角がそこからしづかに覗いてゐるからである。

出帆前なので船の機関はすでに活動をはじめ、櫓網^{ロー}の電燈がびりびり揺れてゐる。

白い船体にともつてゐる電燈はそのことごとくが真黄色だ。自分の眼が遽かに黄疸に罹つたのかと思ふくらゐ真黄色だ。

船員は出帆作業のために舳^{ツバ}さきに集り、或る者は真座の上にくろりころりと寝転んでゐる。

商船が一隻、河港から降りて来て同じ棧橋の上手に繋つたところもち船体を傾けて繋つた。舳^{ツバ}さきには夜目にも白く「鶴羽丸」と三字。

船の煙はながくなく河の上にとりのこされてゐる。

この船は私の船よりもさきに解纜した。この船は錨をから

からと捲き揚げながら、直ぐ棧橋を離れた。まことに気軽な船であつた。この船はしづかに私の船のそばを通り過ぎた。この船は湖上の遊覧船のやうに可憐であつた。そしてこの船は草笛のやうな汽笛を吹いた。

対岸に造船所がある。巨きな船体の向ふで熔接の火が紫に炎える。火が消えれば真闇となるが、ともればたらたらと火をこぼし、ときに探照燈のやうにひかりを放射する。

第二回南丸。造船工は熔接の紫火を炎やし、夜も働いてやすむときがない。

私の船の出帆時刻が来た。

ラヂオは文楽の中継放送。太棹の音。

別離の情は舷が低ければ低いほど切ないのである。

出航する私の船をあまたの船が黒くしづかに並んで目送する。私の船も剩燈をすっかり消した。

くらがりをやつて来る船がある。前後の櫓燈、右舷の緑燈、左舷の紅燈。(私は大学で聞いた戦時国際公法の講義を憶ひ出した。哨艦信濃丸は隴にかすむ月光のもとに、三櫓二煙筒の大汽船に出遭つた。然もそれは白紅白燈を櫓頭に連掲する敵の病院船であつた。)

すれちがふときにわかつた。それは「大信丸」であつた。

白い船廊の燈は硝子器の中の燈のやうにうるんでゐる。

大棧橋に満船、燈をちりばめた船が繋つてゐる。ネルソンの旗艦「ヴィクトリア号」にそつくりだ。阿波へ通ふ納涼船にちがひない。

燈台の燈を見て港口を出離れると、もう手近に燈はない。

見えるのは、阪神間の陸の燈。山手からなだれて来るその燈を汀線がうけとめてゐる。はしつてゐる電車の燈も見える。

神戸港に入つてまづ眼に見るは造船所。夜もニューマチツク・リヴエツタアがぶつぶつぶつと鉄鉋に鉋を打つてゐる。

棧橋を自転車がはしつてゐる。

私の船は棧橋に着き、船体に惜みなく燈をつけた。

ラヂオが時報の鐘をうちならした。腕時計には必らずいくらかの遅速があるものである。

ここにも別離の情がある。十銭白銅がテープと換へられた。受け損じた白銅貨がちんと音を立てて転がり、探してもそこらには見あたらない。

船はまもなく解纜した。甲板にゐると、頭上の船橋楼に船長の声が聞える。

船は港内の広場へ出て、ゆくさきへ舳さきをむけた。

突如頭上に、途方もなく大きい汽笛が鳴り響いた。私は胆をつぶした。私は手に持つてゐる書物を危ふくとり落すところであつた。私はこの傍若無人な音に対する私の憤りを一体誰のところへ持つて行けばいいのであらうか。誰のところへも持つて行きやうがない。

船は進む。近景の移動はすみやかに、遠景の移動はゆるやかに。

港内の貨物船は荷役の燈を煌々ともし、クレーンがしきりにはたらいてゐる。

船は造船所の近くを通る。

鐵装船は夜も朱く、造船工は夜を徹して鉋を打ちこんでゐる。

龍骨は、発掘したばかりのマンモスの骨。

速力のついた船は神戸港外に出てしまった。檣網はびんびん鳴つてゐる。

私は船室にもどり、手提砲の草色を恥ぢ、シャープ・ペンシルのうすい芯を氣にかける。

私はいよいよ旅に出るのだ。

(「海」昭和13年8月)

山の人々

青森の埠頭には、明るい燈に照らされて、連絡船が繋つてゐた。

私は、昔、小学校の五年のとき、やはり夏の夜更に、はじめて津軽海峡を渡つたことがある。一家を挙げて、と云つても祖父父母と私の三人で、樺太へ行く途中であつた。

私達の乗つたランチが暗い港内を進んで行くと、すこし離れたところに、紅い燈と暗い燈を点けた船が碇泊してゐた。ランチはその船尾に近づいて、右舷に廻り、下りてゐる梯に

横づけになつた。私には、その舷梯がこれから行く遠い樺太への階段のやうに思はれた。潮の香の強いその階段を一步一步登つたことを、私はいつまでも忘れることが出来ない。明治四十五年の、七月も終りに近い或る夜のことであつた。

その後、いくたびもこの海峡を渡つたが、再び港内に碇泊する連絡船を見ることはなかつた。

昭和九年の夏の夜更に、私は会社の出張で、又この海峡を渡つたのである。

しづかな航海であつた。夜の明け方、通風筒の碧いその連絡船は函館の湾内に入り、青い山々にとりかこまれた。海の鳥が船の水尾に下りて浮き沈みした。鶉のやうに黒い鳥であつた。

栈橋には連絡船が繋つてゐて、私の連絡船もその栈橋に着

いた。空には鳩がとんでゐた。

私は、石北線の、遠軽のすこし手前の、丸瀬布といふところへ行くのである。

汽車は噴火湾に沿うて、ゆるい円を描きながら走つた。底の浅いしづかな水面に真白な雲の影が映つてゐた。海辺には到るところに黄色い菖蒲のやうな花が咲いてゐたが、とある駅で、私は駅夫が車掌にその花を手渡すところを見た。汽車が動き出してから、車掌はその花を手に持つて、私のゐる寝台車を通り過ぎ、前の車輛の方へ歩いて行つた。

海の砂浜には、漏斗型の、紅の紫にちかいはまなすの花も咲いてゐた。

野の花の玫瑰濃きに旅ゆけり

競馬場がゆるやかに視野に入つて来て、その柵の外にも黄色い菖蒲のやうな花が一面に咲いてゐた。

線路沿ひの道から、直角に、別れて行つてしまつた広い道のことも忘れられなかつた。それは屯田の村などへ行く道であつたかも知れぬ。

どこであつたか、汽車を怖がつて、親のしりへにうろろしてゐる仔馬も見て過ぎた。

北海道も昼は暑かつた。列車が長万部に着いて停つてゐる間に、私は、車庫の外に出てゐるラッセル除雪機関車を見た。その機関車の鉄は、指先で触れば、火傷をするくらゐ灼けてゐるにちがひなかつた。その季節外れのものを見て、私は烈しい暑さを感じた。私は睡眠も不足してゐた。

暑き蝦夷除雪機関車を駅に見ぬ

羊蹄山にはまだ雪が残つてゐて、その山の裾は汽車の通るすぐそばまで熔岩が転つてゐた。白樺をまじへた森林帯に入ると、電線が低く汽車に沿うて走り、虎杖の花が咲く沢に駅のシグナルが立つてゐたりした。

私の乗つてゐる寝台車には、私の他には客はなく、汽車は駅毎に停つて、北上して行つた。

ゆふちかい野には、馬鈴薯の花が鮮かに咲いて、蝦夷の土壌は実に黒かつた。

暮れて小樽に着いた。昔、樺太へ渡航したとき、私達は、中央小樽といふ駅で降りて、この町の旅館で一夜寝て、その翌日、大阪商船の大礼丸といふ千噸そこそこの船に乗り込んだ。二等船室に入ると、ボーイがやつて来て私達を一等船室に案内した。祖父が、豊原から発行されてゐる樺太日日新聞の社長であつたから、事務長がさういふはからひをしたのである。子供の私にもそれはわかつた。海はかなりしけ、私は船室に籠つたまま、ボーイの運んで来た洋食の匂ひを嗅いだ。夜が明けてはじめて見た亜庭灣の潮は真黒であつた。

中央小樽といふ駅にはさういふ少年時代の思ひ出がのこつてゐた。

私は、後にその事務長に大連航路の船で会つたことがある。事務長はもとより子供の私をおぼえてはゐなかつたが、私は事務長をおぼえてゐて、昔の話をした。事務長は下船した後私に手紙を寄こしたことがある。

夜、札幌に着いたとき、寝台車に乗つて来たひとがあつた。偶然にも、私が行かうとしてゐる釧山のM氏で、私は以前からそのひとをよく知つてゐた。

M氏は私を見て、怪訝な顔をしてゐたが、私の用件に気がついて、「あゝ勅使か」と云つた。私はぶつと噴き出した。毎年六月の終りに、その釧山の本社から重要な書類を搬ぶ慣例があり私はその用件で来たのである。勅使といふM氏のおどけた表現に、私は思はず噴き出したのである。M氏は札幌まで出て来て、その汽車で山へ帰るところであつた。

翌朝四時に私達は丸瀬布の駅に降りた。

汽車がその駅に近づいたとき、M氏は私に話した。

「札幌へ出ると、酒を飲んで、いつもこの汽車で帰つて来るんですよ。ふと眼が醒めて、停つてゐる寝台車の窓から見ると、丸瀬布なんです。これあ大変だと云ふんで、窓から洋服もワイシャツも、ネクタイも、靴も何もかも雪の上に投げ出し、大慌てに慌てゝ降りるんです。そして汽車が出てから、雪の上に散らばつてゐるものを拾つて身仕度をするんです。それが常時のことでした」

M氏は以前からさういふひとであつたが、釧山に転勤してさういふ傾向が一層助長されたやうに思はれた。私は笑つてゐるより他はなかつた。

駅に降りると、あたりの風景は、北海道の奥の北見といふ感じではなく、内地の山間によく見る村のやうであつた。遠くの山が朝日に紅く焼けてゐた。駅前のうまごやしの中に踏

み入ると、靴はたちまち露に濡れそぼった。私はそこに立ちながら、北見の国に来てゐるといふ実感がすこしも湧いて来ないのであつた。

あさ露に 苜蓿踏みぬ北見かや

迎への自動車が鉾山から来る間、私達の休憩した駅前の旅館では、朝日がさし込んで、炬が真紅に燃えてゐた。しかし、それは決して熱いといふ色ではなかつた。山浅く鶯の鳴いてゐるのが聞えてゐた。

自動車が来て、鉾山へ向ふ道辺には、矢車草の畑や薄荷の畑があり、空を行く索道が鉾山の近いのを思はせた。ざるをがせの垂れ下つてゐる落葉松の峠を越えた途端に、風景は一変した。林を拓いた草原には、伐り残した根株が高く立ち並んでゐた。山火事に幹の焦げた樹も立つてゐた。さういふ開墾地を、私は少年の頃、樺太で見慣れてゐた。私は、たちまち、家郷を遠く来たことを身に沁みて感じた。

それから道辺に野茨の咲きみだれたところなどがあり、自動車は、そこを歩いてゐる渡り鉾夫を追ひ越して、鉾山の事務所に辿り着いた。

出張の用件を無事に果した私は、さすがに疲れをおぼえて、事務所の椅子に身を凭せた。大阪を発つて、幾夜かを汽車に寝つづけて、やうやく目的の地に來たのであるから、無理もなかつた。

M氏は経理の方の課長であつたが、私に、背の高い採鉾係のK氏を紹介した。北大を出て間もない、若い工學士で、大

学の総長の令息だといふことであつた。K氏がその翌日から鉾山の案内をして呉れることになつた。

宿舎の方へ下りて行く坂道で、私はのぼつて来る蛇を見た。蛇だと思つたとき、通りかゝつた二番方の若い鉾夫が、その蛇を打つて打つて打ち据ゑた。星の白い目の下にその蛇は横たはつて、いつまでも尾のはしを動かしてゐた。たゞの蛇に過ぎないその蛇がたちまち眼の前で殺されたことは、疲れてゐる私の身にひどく応へた。

ゆふぐれに空が曇つて、雷が鳴りはじめた。その音響は鉾山全体にひびき、その鉾脈の岩々にもひびくやうに思はれた。

金山の雲のいかづちとよもせる

そのうちに、どつと夕立が降つて来て、宿舎のほとりに群がる落の葉を濡らして過ぎた。落の葉は濡れたまゝ暮れてしまつたが、明るい月が出て、照りわたつた。女中が来て、部屋の煖炉を焚きつけた。

旅の疲れがひどかつたので、その夜の眠りはかへつて浅く、大きな落の葉が夢路に現れたりした。うとうとしてゐると、どこかで啼いてゐる郭公のこゑが聞え、あゝ郭公が鳴いてゐると思ひつゝ、私はその儘深い眠りに陥つた。

翌朝も煖炉が焚いてあつて、郭公が極く近くで鳴いてゐた。郭公やねむりのあさき旅の夜を

郭公のあしたゆふべに煖炉焚く

坑内に入る身仕度をして、私はK氏と坑内に入つた。通洞はかすんで湿気を帯びてゐた。新たに発見された鉾脈を見に、

私達は真暗な坑道を奥へ奥へと進んだ。K氏は坑内燈で、花崗岩のやうな岩の壁を照らして、この黒い溝が金ですと云つた。

その坑を出て、斜面にある選鉱場を見て、鉱夫長屋を通つたとき、K氏はつと一軒の家に立ち寄り、濃い青蚊帳の中に寝てゐる鉱夫に声をかけて、怪我の方はだいぶいかとたづねた。鉱夫は何か答へたらしがつたが、私の立ちどまつてゐるところまでそれは聞えなかつた。

背の高いK氏と私は又連れだつて、K氏が坑道の掘進をはじめた新しい坑の方へ行くことになつた。それはかなり離れたところで、落の繁つた径を通つて行かなければならなかつた。ときどき雨が通り過ぎて、落の葉や野茨を濡らし、道辺に祀つてある金山彦命・金山媛命の祠を濡らした。

K氏の担当してゐるその坑は、堅い花崗岩をまだ五間ほど掘進しただけで、奥の突きあたりには、鑿岩機の岩を穿つとどどどといふ音が聞えてゐたが、そのうちに、発破のときが来て、鉱夫達が走り出て来た。私達も草の中に身を潜めてゐると、轟音とともに、坑口から岩の破片がとび出して来て、落の葉を突き破り、樹の幹にあたつて弾ねかへつた。そのときの空氣の振動ははげしく、私の着てゐる坑内服の袖口や上着の裾を煽り、あたりの落群を混乱せしめた。やがて発破のけぶりが坑口から出て来て、しづまりはじめた落群へどんどん流れて行つた。

私は責任を一身に負つて、鉱夫達に何か指揮してゐる若い

K氏を見た。さういふきびしい現場の仕事に比較すれば、大阪の本社で、机に向つて、調査などをしてゐる私の仕事は云ふに足らぬものであつた。

発破が終つて、落を濡らしてゐた雨はやんだやうであつた。私達は、その現場にちかい合宿に行つて昼食を摂つた。食卓には沢で採つた菜のしたしが出てゐて、若い職員も鉱夫もそれに黒い醬油をかけて食べ、口を動かしながら、おかはりの飯をよそひよそひしてゐた。K氏も山中のその合宿に寝泊りして、沢の水を飲み、沢で採つた菜のしたしを食べて、責任のある仕事に従つてゐるのであつた。

K氏は私にいろいろと仕事の上の話をした。発破の音がときどき聞えて来た。

K氏は私を宿舎に送るために、又落の繁つた径を案内した。すこし行くと、鉱夫が担架の上に横たはつてゐた。脚に繃帯を巻き、それに血がすこし滲んでゐた。二人の仲間が病院へ搬ぶ途中、担架を降ろして休んでゐるところであつた。その鉱夫は薄荷か何かの葉を手にしてときどきそれを嗅いでゐた。K氏は睨んでその鉱夫の顔を覗き込み、傷の痛みをたづねた。鉱夫は発破の破片で脚をすこしやられましたと云つてゐた。私も睨んでその鉱夫を見てゐたが、落の茎の濃い紫が、物悲しく私の眼に沁みた。

私は、翌日、その鉱山を出発した。

坑内を詳しく案内して貰つたのに、私には鉱山の印象はかへつて薄かつた。それよりも私を案内したK氏そのひとのこ

とはあととも想ひ出すことがあつた。

それから十幾年経つた昭和二十二年には、私は既に会社を辞して病を養つてゐたが、或る日新聞が四国のB銅山の、坑内火災を報ずる記事を読んで、私はその殉職者の中に採鉱部長のK氏の名を看、愕然とした。

新聞の記事では詳しいことはわからなかつたが、部下を愛するK氏は部長の椅子に腰を卸して、救出作業の指揮をとつてゐるのに堪へられなかつたのではないだらうか、そして自らも防毒マスクをかぶつて坑内に入り、救出作業の先頭に身を置いたのではないだらうか。採鉱部長が何も職に殉じなくともよいではないかと云ふのは、素人の考えであらう。現場で苦勞したK氏には、部下を見殺しにするやうなそんな高見の見物は出来なかつたにちがひない。採鉱部長といふその椅子はやがてその銅山の重役を約束するものであつたが、K氏にはそんなことは念頭になかつたにちがひない。K氏に心服してゐた鉱夫達はK氏の死をどんなに嘆いたことであらう。後になつて聞いたことだが、同じ年にその銅山に起つたあの争議が、ひどくならずにおさまつたのは、K氏の人柄に負ふところが多かつたさうだ。それはほんたうであらう。昔、私があつたK氏は、北大を出た翌年で、まだ二十六ぐらゐの青年であつたが、私が既にそのとき、この青年の将来に期待したのである。その後十数年の間に、K氏はぬきんでてB銅山の採鉱部長となり、又齡、四十に達して人間としても大きな含みのある人物になつてゐたであらう。実に惜しいひとを死

なしたものである。

事の序に、私はM氏のことと記して置かなければならぬ。M氏はその後、大阪の製造工業の部門に転じて、重要な地位に就いてゐた。戦争中、その会社は増産を強められ、その直接の責任者だつたM氏は述二無二奮闘をつづけた。そして過勞の極、終に殞れたのである。M氏の死も新聞に報ぜられ、私を嘆かしめた。

私は、その記事を読んで、直ぐ、昔M氏が石北線の寝台車の窓から丸瀬布の駅の雪の上に、身のまはりのものをどんどん投り出したときのことを想ひ起した。M氏はきつと最後のときも自分の身体からありたけのものを投り出して奮闘したのではあるまいか。しんじつは飄飄たる風格のひとつであつたから、肚の中ではえらいことになつた、えらいことになつたと云ひつゝ終に職に殉じたのではあるまいか。私は、M氏のことも忘れることが出来ない。

北海道の鉱山に行つたといふその偶然なことから、私は、M氏とK氏とを私の生涯忘れ得ざる人々の中に加ふることになつたのである。

その鉱山の帰りに、私は層雲峡といふところへ行つて見たが、バスで行つて、次のバスで戻つて来るといふ慌しい見物であつた。

あの峡谷は、私には、造化が築きつゝある途中のやうな気がした。

峡谷に沿うて青く日を透かしたいた、や、か、へ、での木が美しか

つた。奥の温泉には傷を癒やしてゐる白衣の病兵がゐた。それから私は、開鑿をしてゐるひとが道辺の落の下でひとり昼寝をしてゐるのをあはれと見た。

句はひとつも出来ず、駅に戻つて来て僅かに

登山駅スタクカムシユベの峯^ねを遠み
といふ句を作つたに過ぎなかつた。

本線に出て来ると、石狩の平野に夕日が低く懸り、その光が虎杖の花を透かしてゐた。別のところでは、裸馬が走つてゐて、犬がそのあとに随いて走つてゐた。

その夜、私は、砂川の支線の奥にある炭坑に着いた。

汽笛が鳴つて夜が明けると、宿舎の前に堅坑の櫓があつて、ロープを捲揚げる車が絶えずくるくる廻転してゐた。汚れた構内を金魚売が通つて行くのも見えた。

坑内服を着けた私は、ケージでその堅坑を下り、案内者の後から坑道を歩いて行つた。その炭坑はガスが多く、切端^{きりばた}へ行くと、案内者は急に暗くなつた坑内燈を眼の高さまで持ち上げて焰に赤い炭塵の燃えるのは、この辺に悪いガスがある証拠だと説明した。私はいゝ気持ではなかつた。

その案内者は暗い坑内をどンドン歩いた。そして突然、坑道の壁の潜戸を開けて入つた。私も入つて見ると、帽上燈のひかりで、梯子が真直ぐに下へ降りてゐるのが見えた。案内者は慣れた足どりでそれを降りはじめた。私も従はなければならなかつた。私は腰を落し、その梯子の一段一段を踏みたしかめつゝ降りはじめた。一步誤まれば身は暗黒の底へ転落

してしまふ。案内者はどンドン降りる。私も遅れじと懸命に降りる。梯子は尽きると、つぎの梯子となり、それが尽きると、又つぎの梯子となつて、終るところを知らぬ。私は降りに降りた。暗黒なればこそ降りられたのである。明るみならば、恐怖のために足もすくみ、眼も眩んで、そんな直立の梯子を降りることは出来なかつたらう。しかし、降りるに従つて底にちかづくといふ感じは私のこゝろを次第に落着かせた。一体どこまで梯子はつゞくのであらう。上を見ても見透しはつかぬ、下を見ても見透しはつかぬ。私は、地獄の底までもと観念して、降りに降りた。意外に早く、案内者の立つてゐるところに私も下り立つた。「これが坑底です」といふ声が聞えた。

助かつたと思つた瞬間、いまゝでの緊張感が一時に弛んで、私は全身的な疲労をおぼえた。ふくらはぎが堅く凝りかたまつてしまつたやうであつた。

私は、その地下千数百尺の坑底で、炭車の運搬に従ふ幾匹かの馬を見た。

それ等の馬の眼球は私の帽上にかゞやくウルフ燈に照らされて晶玉のやうに澄んでゐた。私はそんなに濁りのない眼球を見たことがなかつた。さういふ眼球は決して地上のものではない。それ等の馬はウルフ燈の強い光と人間とを極度に恐れて、たとへ愛撫のためとはいへ、人間の手が触ると、その手の触つた部分の筋肉だけがびりびりと痙攣した。それにその瘦せた肢体！

私の心を傷ましめたのはそれだけではなかった。それ等の馬には、坑外に出る機会が全くないのであつた。それ等の馬は体の小さい時分に堅坑のケージで降ろされて来たのであつたが、体が大きくなつてしまふと、最早坑外へ出る方法がないのであつた。私は、じめじめしたその坑底の土に、くつきりと印せられてゐた馬蹄のあとを私の眼底から払拭することが出来ない。

その坑底から一人がやつと通れる狭い斜坑を登つて行くと、広い坑道に出て、それが又斜坑になつて坑外に通じてゐた。私達がそこを登つてゐるとき、坑外へ出る馬に追ひ越された。馬は白馬で、実に生々しい顔をして、しつかりした足どりで登つて行つた。登るたびに安全燈が胴腹をうつた。

夏の外光は青草を照らして、坑口は真青であつた。温度は次第に上昇した。坑口の真青な色はその白馬を真青に染めた。馬はいよいよしつかりした足取りで登つて行き、胴腹の安全燈は消え入るやうに赤かつた。

坑外に出たところに栗の花が咲いてゐた。外気は温湯のやうであつた。植物の熟れた甘さがそれに溶け込んでゐた。坑外に出た馬の喜びやうはなかつた。馬は虎杖や蔦の繁つてゐる道をどんとん駆け出して行き、坑夫は手綱にひきずられながら追つかけた。

その道を私達も随いて行くと、案内者の掲げてゐる坑内燈がころころと鳴るのが聞えた。

坑出でし坑夫の肩を虹過ぎつ

夏のひかり帽上燈はひかり失す
その翌日、山を越えて支山にも行つて見た。その古い炭坑は、蔦の繁つた沢を挟んで、二つの山に分れてゐた。ときをり、ずしんと鳴る発破の音がその蔦の沢の真下に籠つて聞えた。蔦にはこまかい雨が降つてゐた。北海道といふところは行くところ行くところに蔦が繁り、その葉にきまつて雨が降つてゐる。

私がその沢にうち重つてゐる倒れ木を見てゐたとき、奥の坑口から電気機関車が炭車を索いて現はれ、真昼といふのに明るい前燈で蔦に降る雨を白く照らしつゝ、沢の架橋をとろき過ぎた。炭車の数知れぬ車輛はその沢に反響していつまでも走つてゐた。

地にこもる発破を聞きぬ蔦の沢
落の沢炭車の行ける音はする

私達はその沢に下りて、川のはとりに石炭の露頭のあるのを見た。葡萄の花が高いところからしきりに川に落ちこぼれた。

青嶺を背にして朴の花の咲いてゐるところに選炭場があつた。そこへも行つて作業を見た。選炭といふ黒々した作業に使はれてゐるのは、思ひがけないことに、若い娘が多く、コンベヤーで眼の前を通る石炭につと手を伸ばし、槌をふるつてその石炭の塊を割つたりした。若い娘が眉間に皺を寄せて、炭塊を割つてゐるのを、いゝなあと思つて私は眺めた。

ゆふちかく、群鴉が鳴いて過ぎ、身丈より高い蔦の道から

煤けた顔の坑夫達が長屋の方へ帰つて行つた。私達は丘がつたその長屋へ行つて見ると、身ごもつた若い妻や子供達が礼をしたりした。何処の家にも夫を待つつゝましい食卓が見えてゐた。

私達は病院にも行つて靴を脱いで上つた。疊敷きの病室には、青白いが眉目の秀でた若い坑夫が臥てゐた。妻らしい若い女のひとがゐて私達に丁寧なお辭儀をした。

山深くに小天地をなして、まるで桃源境のやうな炭坑であつた。再び訪ねて行けば、最早そこには炭坑の影も形もない——といふやうな感じの炭坑であつた。

空の索道も暮れて全く見えなくなつてから、私達は提灯を提げ、山を越えて歸つて来た。

その翌日、私は又、岩見沢で乗り換えて、その終点の幾春別まで入つて行つた。そこにも会社の炭坑があつた。

しかし私は、その宿舎に着くなり、体に変調をおぼえて、臥た。連日身の休まる時がなかつた上に、千数百尺の坑底まで下りた日の疲労がひどかつた。炭坑の医師が自転車で行つて来て、ゆつくり体を診て、粉薬などをとよけて寄こした。

その日の見学は断念しなければならなかつた。翌日は休日であつたが、事務所を訪ねることにして、くさむらの額の花に眼をとめなどして出掛けて行つた。係長がわざわざ私のために出勤して炭坑の説明をし、しまひには、事務所の床に白墨で炭層を描いて私に吞み込ませようとした。係長はエンドレスの動かない斜坑の口へも私を連れて行つてなほ説明を

つづけ、誰もゐない坑外の施設も見せた。それはかりではない。折角の機会だから、すこし離れてゐるが支山へも案内しようと言つた。

私達がその方へ赴く途上、一人の坑夫に会つたが、その坑夫は立ちどまつて、落磐のために馬が死んだことを告げた。係長は馬の名をたしかめて、しばらく眼をつぶつてゐた。その馬を知らぬ私にもその話は悲しかった。

暑い日であつた。硬山に煙のやうなものがあがつてゐた。

硬山は自然に発火して消ゆるときがないのださうだ。

一駅汽車に乗つて目的の駅に下車すると、駅前に坑夫を相手とする居酒屋が並んでゐた。そこを出外れたところに、うまごやしの広い原があつて、そこに酌婦が二人寝転んでゐた。腰には細帯を締め、足は素足で、朱い虎杖の花を喜んでゐた。

私達はそのすぐ傍を過ぎて炭坑の方へ向つた。係長はすこし肥えたひとであつたから、道々、額の汗をハンカチで拭いた。私は、いましがた見て来た二人の酌婦を句に作らうと思つてゐた。二人とも酌婦ではつまらない、一人は坑夫か、それとも開襟シャツの技手か何かにしようか、いややはり坑夫がいゝ、その坑夫と二人で寝転んでゐるのがいい、酌婦の手はその坑夫の手をしつかりつかまへて離さない、坑夫は酌婦のハンカチを借りて自分の汗ばんだ顔を拭く——さういふ場面を想像して私はいくつかの句を作つた。

うまごやし炭坑の娼婦帯を結はず
娼婦の手坑夫はなたずうまごやし